



University of the Ryukyus Library Bulletin Vol.33 No.4 (No.128) October 2000

電子化図書館への道

—教育・研究体制の変革—

小杉 忠誠

○はじめに

平成9年2月3日 文部省学術国際局学術情報課大学図書館係長名で、「電子図書館的機能の充実・強化と文教施策について」が通達されている。その通達の中には政府・学術審議会等のそれまでの歴史的経過に沿った答申や建議がまとめられている。本稿では、琉大においても電子図書館的機能の強化が余儀なくされている背景と、その強化に向けての基盤整備への提言を行いたい。

○歴史的背景

平成5年12月16日には「学術審議会学術情報部会報告」の中に、「大学図書館機能の強化・高度化の推進について」、平成8年7月29日には「学術審議会建議」の中に、「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について」の答申がみられている。これらの答申を受けて、特に国立大学

においては、学内LANを活用した情報提供に必要な整備及び市販電子化資料(CD-ROM)の整備、学術情報センターにおける電子図書館システムの研究開発や事業化計画の促進、大学の特色を活かした先導的なプロジェクトの支援を行う必要性が文部省から発せられている。さらには、電子化図書館に向けての当面の課題としては、需要への適切な対応、人材の確保、養成、情報リテラシー(情報利活用能力)教育の充実、また、情報化により露呈する著作権の対応等があげられている。各大学における電子化図書館の実現に向けての具体的行動計画の策定にあたっては、整備のためのビジョン策定、学内関連組織との連携協力の重要性が述べられている。このような、文教施策の実施を行うにあたっては、各国立大学にあつては、多くの困難が明らかになってきた。

電子化図書館への道	目次
—教育・研究体制の変革	医学図書館の地域医療情報サービス
.....小杉忠誠豊平朝美
1	6
全国図書館大会への誘い	お知らせ
.....
5	8

附属図書館のホームページ (<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/>) もご覧下さい。

そこで平成9年8月8日には、国立大学図書館協議会が「大学図書館機能の強化・高度化に関する」要望書を文部省に提出した。この要望書の主旨は、基盤施設を有効に活用して各大学の図書館運営の効率化を進め、今日の大学にみられる多様な情報需要に応えていくことであり、これを押し進めるための財政的保障を要望するものになっている。すなわち、高度情報化は大学図書館が備えるべき図書館資料の面でも、また利用者に提供するサービス形態の面でも、かつてなかった多様化をもたらしており、研究・教育のためのさまざまな電子媒体資料の整備・作成・提供、さらには学術情報の対外発信機能等の必要性が高まっているとの認識を国立大学側は示している。加えて、大学内外の図書館間の相互連携、大学図書館の社会への公開、国際化への対応等の要請も一段と強まっている現状も認識されている。このような背景のもとに、電子図書館的機能の充実・強化は、大学図書館の時代要請に適応した存立には不可欠の条件であり、現存の大学図書館にあっては従来の諸業務の一層の改善を図るとともに、整備を推進していく上での設備等の経費、図書館資料購入費や図書館資料の保存設備の充実等の必要性が要望されている。このような要望書をみるまでもなく、諸種の図書資料の電子化は、コンピュータネットワークを介することにより、当該の図書資料を所蔵する図書館に行かなくとも、またその開館時間の制約にも拘束されずに、利用者が必要とする情報を入手することを可能とする方法である。特に、蔵書所在目録のデジタル化は、図書館業務の全面的な自動化にとって不可欠な前提条件であり、その全面的な実現は万難を排して、優先的に行わなければならないのも事実である。諸種の一次資料のデジタル化は、国内外の図書館間の相互連携の推進や、貴重な図書資料の保存にも適しており、さらに情報入手後も情報内容の加工等がかなり自由に行えることから、研究・教育の態様を変える可能性を秘めている。研究・教育における支援施設として、国内においてはほとんどすべての学術情報を集積している大学図書館が早急に電子化への対応を図り、これらの期待に応えることが大学の研究・教育環境の基盤整備において、さらには大学が内外の社会に対して果たすべき重要な

責務となってきた。以上述べたように、情報化時代の進展と共に大学図書館の有り様が大きく変革されなければならない。また、同時に大学改革における教育・研究体制の改革と直接的に連動している電子化図書館への道の歩みを早め、実現を急がなければならない。

○ 琉大図書館の歩み

〈現状〉

平成8年度から、CD-ROM等電子的情報資料の購入が始まった。しかしながら、このような電子媒体の購入費用は従来の図書館予算から捻出することができず、新たに学長に予算要求を行わなければならなかった。図書館の電子的情報資料サービスの先駆けとしてのCD-ROMデータベース・サービスは、教員の学術研究や大学院生等の調査研究能力育成に役立っている。また、これらの利用方法に関するサポート体制を確立するために電子情報係を設置して、定期講習会や授業の一環としての講習会を行っており、一部はシラバスにも組み込まれている。CD-ROMデータベース・サービスは、いまや本学における図書館サービスの重要な位置を占めている。CD-ROM購入経費の不足に対しては、従来の資料費の見直し、また、CD-ROMデータベース利用に対する課金等で補填する努力を行ってきた。平成11年度までの集計においては、受益者負担額が年々増加している。この増加はData base利用度の増加を示している。ネットワーク経由で提供するCD-ROMデータベースは、current contentsも含めて現在11タイトルある。SCI, SSCI, A&HCI, current contents, Inspec等の課金体系の見直しを計っており、これらのデータベースの研究室からの接続には、利用料金を無料にしている。課金を行うにあたっては、課金料金の上限を1ユーザあたり年間2万円に設定されている。このように、当琉球大学附属図書館においても二次資料の電子媒体を介して、研究が展開されている。一方、各種ジャーナルは、現在冊子体として購入している。因みに、医学部分館ではコアジャーナル洋雑誌購入額は約5300万円、和雑誌400万円であり、これらの購入費は、いずれも講座研究費からの拠出であり、多大な出費である。年々値上げされている冊子体の購入費

の高騰には、抜本的な対応が迫られているのも事実である。また、これら冊子体を利用するにあたっては、開館時間中に貸し出しを受ける必要があり、24時間図書館利用が不可能な現在にあつては、利用効率の悪さがみられる。一方、冊子体の保管には、書棚等の保管スペースの確保にも限度があり、今後の対策が必要となる。

〈電子ジャーナルの登場と特長〉

情報通信技術の発展に伴って、オンラインによるジャーナルが登場した。1992年に米国OCLC (online computer library center)が臨床科学雑誌をインターネットで提供を始めた。1998年には、丸善カタログでは約100社の出版社の約5000タイトルが記載されている。今後ますます全ジャーナルに占める電子ジャーナルの数が増してくると思われる。このような電子ジャーナルは、主にインターネットを通じて電子的に提供される雑誌であり、従来冊子体で刊行されている雑誌のオンライン版が大部分であるが、中には冊子体を持たないオンラインデータベース等で提供されているものもある。その他にCD-ROMで提供されたデータをローカル・ホストに蓄積し、イントラネットで使うオフライン・タイプの電子ジャーナルもある。CD-ROM版は、即時性の点で難点があり、オフラインデータベースでは図表等を除いた本文だけしか提供せず、自然科学分野のジャーナルでは、その購読に制限のあるものもみられている。

しかしながら、電子ジャーナルには多くの特長がみられる。冊子体の保管とは異なり、省スペースが可能である。また、印刷や郵送の行程が省かれるため、論文や記事が書かれてから読まれるまでのタイムラグが大幅に短縮される。タイトルによっては、従来の冊子よりも2週間から1ヶ月も早く最新論文を読むことができる。情報の鮮度を重視する先端分野の研究者にとっては見逃せない「速報性」が特長である。さらには、最新号または過去の巻号の中から、求める情報を容易に探り出すことができる。検索の機能としては検索項目、演算子、さらに範囲としては、目次、抄録、全文、雑誌の横断が可能であるマルチメディアとしての機能を有している。すなわち、冊子体では実現不可能な動画や音声、三次元画像等のデータを備えているもの

もある。関連論文や外部データベースへのリンク、また著者や編集陣とのコミュニケーション機能を備えており、研究者の研究発展性がうかがえる。しかしながら、現在はまだ冊子体とのコンビネーション購読が一般的であるが、データを保存するハードディスクが必要な場合もある。また、複数のユーザーによる同時利用が可能であり、データの再利用（データベース）の構築が容易である。管理上よくみられる未着/欠号がない等の特長を有している。電子ジャーナルの価格体系は各出版社によって様ではない。冊子体に付属して無料で提供されているもの、プリント版購読を前提として僅かな追加料金で購入可能のもの、オンライン単独で有料のものがある。しかし、我々利用者にとって最も魅力なのは、コンソーシアム契約が可能な出版社からの発行ジャーナルの存在である。Academic Press社発行の全電子ジャーナルにコンソーシアム契約が可能となっている。5～6校の大学図書館がコンソーシアムを形成すると、低拠出金額で電子ジャーナルをオンラインで購読可能となる。タイトル毎にコンソーシアム契約が可能なものがあり、財源の少ない国立大学図書館にとっては、早急にコンソーシアム契約を結べるように努力すべきである。

〈電子ジャーナル購読上の欠点〉

現在電子ジャーナルを提供している各出版社の方針やシステムにより異なるが、大部分の出版社は購読中止後のデータへのアクセスが認められていない。多くの電子ジャーナルは「1年間のデータへのアクセス権」を購入対象としているからである。購入契約年度内であれば、バックファイルを含むサーバー上のすべてのデータにアクセスできる反面、購読中止後は一切のデータにアクセスできなくなってしまうという欠点がある。しかしながら、累積版CD-ROMを購入することにより、このような欠点を補うのが可能となる。

〈おわりに〉

電子図書館機能は、従来の機能を大きく拡大させるばかりではなく図書館の存在意義を大きく変化させるものといえる。

図書館は教育・研究の支援を行う間接的な場

所としての存在意義から、これらの支援を直接的・積極的に行う場所としての存在意義へと大きくシフトすることになる。特に、電子媒体教科書、ジャーナルを装備している図書館においてproblem based learning (PBL)を中心とする学生による自学自習、チュートリアル学習が、図書館のセミナー室等において行うのが可能となるであろう。研究・教育の受身的支援を行う図書館という方向性から、将来を見据えた研究・教育の積極的な支援を行う方向へとシフトする

のが求められている。

電子化図書館への道は、同時に琉大における教育・研究体制の変革への道でもあり、大学の教育・研究機関としての充実を計る上で、図書館の新しい存立意義へのシフトは、必須条件といえる。このシフトは電子図書館機能の強化により実現するであろう。

(こすぎ ただよし：琉球大学医学部教授)

電子ジャーナルの利用について

■ どの学術雑誌が閲覧できますか？

附属図書館のホームページから閲覧できる電子ジャーナルは次の3タイプに大別できます。(平成12年9月現在)

a.サイエンス・ダイレクト

エルゼビアサイエンスグループの16分野1,100誌を中心にフルテキストの閲覧、検索、印刷が可能です。アクセス後にカテゴリー毎、タイトル順等で閲覧可能な雑誌を確認することができます。

b.物理学関係電子ジャーナル

英国物理学会(Institute of Physics: IOP)の発行している雑誌が閲覧、検索、印刷が可能です。これは国立情報学研究所のトライアルに参加することにより、期間限定で(平成13年3月末日まで)閲覧が可能になっています。

c.琉大図書館が購入中の学術雑誌

琉大図書館が購入中の学術雑誌で、無料で電子ジャーナルとしても閲覧できるものをリストしています。

■ 閲覧方法は？

最初に、図書館ホームページの電子ジャーナルのページ(<http://www.lib.u-ryukyuu.ac.jp/retri/oj/>)にアクセスしてください。

a.サイエンス・ダイレクト

「利用方法」の説明に従ってアクセスしてください。アクセスできたら、「簡単操作ガイド」を参照しながらご利用ください。

b.物理学関係電子ジャーナル

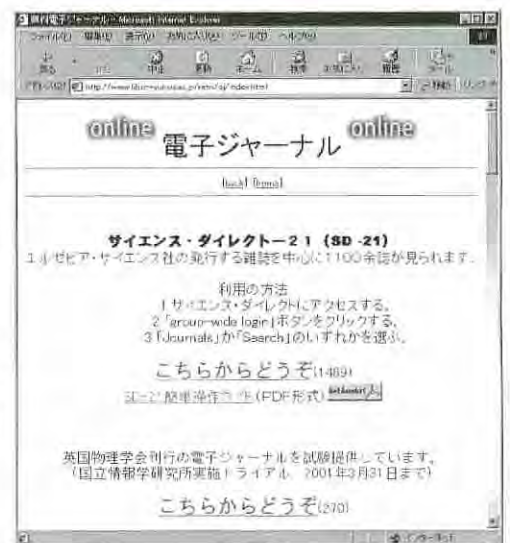
「こちらからどうぞ」をクリックするとアクセスについての説明のページにリンクします。利用方法や注意事項を確認してご利用ください。

c. 琉大図書館が購入中の学術雑誌

本館・医学部分館別に雑誌名のアルファベット順に並んでいますので、閲覧したいものをクリックしてください。

■ PDF形式について...

電子ジャーナルは多くの場合PDF形式で閲覧でき、さらには雑誌と同じレイアウトで印刷することも可能です。PDF表示があるものを閲覧・印刷するには、予めパソコンにAdobe社のAcrobat Readerというアプリケーションソフトがインストールされている必要があります。Acrobat Readerは電子ジャーナルのページから入手することができます(無償)。(電子情報係)



全国図書館大会への誘い

10月25日(水)から27日(金)の3日間、平成12年度の第86回全国図書館大会が「万国津梁の邦沖縄から21世紀へ飛翔～図書館の夢を翼にのせて～」のテーマのもとに、那覇で開催されます。

この大会は全国の国公私立大学・短大・高専図書館をはじめ、都道府県立・区市町村立の公共図書館、学校図書館、専門図書館、読書施設及び関係機関の職員や関係者が一堂に集って図書館活動の活性化を図ることを目的としています。明治39年に東京で第一回大会が開かれて以来、各県持ち回りで毎年開催され、今年で86回目になる伝統のある大会です。最近では全国から約2千人が参加しています。

大会は、初日午後1時から開会式・全体会・記念講演が那覇市奥武山の県立武道館アリーナ棟で行われます。全体会ではこの1年間の図書館界の動向を踏まえた基調報告があります。記念講演は琉球大学教授・高良倉吉氏の「沖縄『文化』復権の課題」です。午後6時からは懇親交流会が開かれます。

2日目は9時30分から午後4時まで、14分科会の研究討議が市内12会場に分散して行われます。分科会のテーマ、会場、講演、発表などの詳細は後述の県立図書館のホームページを参照してください。

大学図書館部会では「デジタル情報時代の図書館サービス」のテーマのもとに沖縄県立看護大学を会場に開催されます。基調講演は大城善盛氏(同志社大学)の「デジタル情報時代の大学図書館と情報リテラシー教育」です。それに続いて、琉球大学附属図書館の情報リテラシー教育(上原恵美:琉球大学附属図書館)、東南アジアの医療情報と国際協力(山口直比古:東邦大学医学部図書館)国際図書館協力の現状と将来(加藤好郎:慶応義塾大学三田メディアセンター)電子ジャーナルとコンソーシアム(山本和雄:大学附属図書館)の4つの事例発表があります。

その他、専門図書館部会では、音楽図書館協議会の「21世紀への課題、医学専門情報の一般市民への公開、技術創造立国の礎”特許電子図書館”」、などの事例発表があります。また、図



書館の自由部会では「豊かな資料提供を求めて～沖縄の社会と図書館～」のテーマのもとに、講演：沖縄の図書館～復帰前後を中心に、シンポジウム：沖縄の社会と図書館が開かれます。資料保存部会では、沖縄近現代史研究と台湾植民地資料の収集、沖縄県公文書館の活動と保存環境の管理、行政文書の整理と保存管理について、などの発表があります。

この日は、午後6時から「図書館ボランティアを考える会」の講演会、パネルディスカッション、実践事例報告会が那覇市中央公民館2階ホールで行われます。

最終日は全体会と閉会式が再び沖縄県立武道館アリーナ棟において9時30分から行われます。全体会では、前日の分科会の研究討議の報告とそれに基づいて全体討議が行われます。

大会期間中には、平行して沖縄県立武道館、沖縄県立図書館、沖縄県青年会館で展示会が開かれます。

全国図書館大会の詳細は、沖縄県立図書館のホームページの中で、全国図書館大会のページ <http://www.library.pref.okinawa.jp/zenkoku-taikai.html> に掲載されていますので、ご参照ください。

全国各地から、多数の図書館関係者が集まるこの大会に、皆さんも参加してみませんか。

医学図書館の地域医療情報サービス

豊平 朝美

はじめに

現在、大学の開放ということで、大学が地域との関りを問われている時代である。そこで、県内医療機関との関りが戦後の沖縄の医療事情から出発しており、また琉球大学の創設の歴史も地域と深い関りの中から誕生していることから、県内医療機関への情報提供等の支援は本学にとっても重要な事である。昨年九州地区医学図書館員セミナーで発表したことをベースに大学図書館の地域医療情報サービスについて述べたい。

戦後沖縄の医療事情

琉球大学教授を歴任した照屋寛善氏の著書『戦後沖縄の医療』によると、終戦直後の沖縄は戦争で荒廃していて、中でもマラリアは爆発的に流行したようである。当時60万人の人口で3人に1人が罹患したが、極端な医師不足で、十分な看護ができなかったようである。そんな中で沖縄における医師数の不足解消のため、琉球大学に医学部設置を要望する住民の声があり、また、本土で医学を修めた医師の定着をはかるため、研究、総合教育病院の建設が待たれた。沖縄の極端な医師不足解消のため、県民の強い願いと日本政府の支援があって、昭和54年に琉球大学に念願の医学部が設置されたわけである。

琉球大学附属図書館保健学部図書室の設置と琉球政府立医学図書館の開館

那覇市与儀に昭和44年4月、保健学部が開設、その後図書室も教室の一角を転用して、開室した。広さは128.3㎡で32席あり、職員2人で内1人は非常勤であった。近くに琉球政府立医学図書館(昭和42年3月10日に設立)があり、当時、医学文献に乏しい沖縄で、唯一の医学専門図書館として資料を収集整備し、医療従事者にサービスを提供してきた。日本医学図書館に加盟していて、職員も慶応義塾大学医学情報センター及び主要な医学図書館で訓練を受けてきた。昭和47年5月に沖縄が日本本土に復帰して、しば

らくして消滅した。その後、収集した医学資料は沖縄県庁の関係部局に分散した。この琉球政府立医学図書館の利用対象者は 医師会、薬剤師会、衛生検査技師等医療従事者、琉球政府医療職員等であった。

医学部分館の新設

千原団地に新館が完成して、首里キャンパスより本館が移転、昭和56年9月に開館した。続いて、昭和59年3月には上原団地に医学部分館も竣工、那覇市与儀キャンパスより移転して昭和59年5月に医学部分館は開館された。分館が新築されて、漸く利用者へのサービス機能を図ることができるようになった。

県内病院図書室の現状

図書室の職員の1名から2名程度でしかも兼任が多く、定員不足の状況である。図書の整理も十分に手が回らない。図書室の規模は大小様々である。利用対象者は病院の医師、看護婦、看護学校の学生等である。利用時間も半数近くが24時間開室しているが、蔵書数、受入雑誌種数も少なく、県内病院図書室間でネットワークを組織して、40%近くを相互に文献複写のやり取りをして助け合っている。残り大半を県外の大学を含む医療機関に文献依頼している。琉球大学にも6~7%の依頼を受けており、県内医療機関に徴収猶予機関として認めることになってから、年々琉大の複写受付件数が増加している状況である。利用者への情報教育については、学内ではワークショップなど定期的を実施して、Medline、医学中央雑誌等のCD-ROMの使い方やOpac等蔵書検索の指導を行っており、県内病院図書室に対しても、要望があれば必ずる用意があることを伝えているが、なかなか時間を割いてこれられない状況である。現状では県内病院図書室からの文献複写依頼に円滑に対応していくことくらいである。年1回の県内病院図書室と本学との交流会を通じて、病院図書室の抱える問題点に触れる事ができ、その悩みを少し

でも解消するため、医学部分館において支援していく必要性を感じる。

相互協力

県内の病院図書室に勤務する職員で構成する「沖縄メディカルライブラリー研究会」がある。大小14機関20名で文献の相互貸借、会員相互の研究会を行っている。それ以前は「県内病院図書室交流会」として活動してきたのを、平成9年に「沖縄メディカルライブラリー研究会」として正式に誕生し、研修を含めた会員の相互協力、研修報告に主眼をおいて活動している。異色なことはこのメンバーに在沖米軍海軍病院図書室の会員がいることである。300種外国雑誌のうち、80種近い電子ジャーナルを導入している。必要に応じて、本国の米軍海軍病院からも文献を取り寄せることができる。本学とは会計上の問題もあって、文献複写の受付は行っていないが、研究会自身では相互に協力している。

病院図書室との交流

現在のキャンパス移転前の那覇市の与儀キャンパス時代は、保健学部図書室があり、本館から図書館職員が異動で勤務していたが、その頃は近く的那覇病院の図書室及び本学の病院図書室と、保健学部図書室との業務の交流があったようである。昭和59年に現在の上原キャンパスに移転してから、昭和60年頃から担当者レベルで親睦会のような交流が琉大の呼び掛けで行われてきた。それ以後現在まで交流会を続けてきた。平成9年には公立病院の図書室から、徴収猶予機関として文献複写の申込を受け、昨年平成10年にはさらに拡大して、医療法人の病院図書室に対しても、徴収猶予機関として申込を受けられるようにした。これにより、県内病院図書室は本学からの文献を早目に入手できるようになった。

終わりに

日本本土と違って、戦後長期間米軍統治下にあった沖縄で、県民の強い要望に基づいて琉球大学が創立された経過や、医学部の設置が実現された事を考えると、琉球大学が地域への果たさなければならない役割も大きい。国立大学の

法人化の検討や国立大学の定員削減は、毎年厳しい状況になっている。又、最近の外国雑誌の高騰で医学部分館も平成11年度から12年度までに購読外国雑誌を150種も中止しており、平成13年度も約50種余を中止予定である。本学が県内の医療機関から複写依頼されている雑誌は外国雑誌が大半を占めていることから、医療機関への文献複写サービスに影響を及ぼすことも懸念される。昨年の九州地区医学図書館協議会で出された外国雑誌の問題で、九州大学医学分館の園田専門員からの報告によれば、九州地区で継続している純タイトルは2,365誌あり、その中、1館のみが所蔵している雑誌が1,197誌(54.8)、2館所蔵が368誌(15.6%)となっている。今後、稀用雑誌も含めて、九州地区でも分担収集していく方向や、県内でも病院図書室を含む分担収集を検討していくようにすれば相互協力も更に実のあるものになると思われる。地域医療機関が地域への果たす役割は大きく、その先端で任務を担っている病院医師や看護婦等に対する病院図書室の果たす役割も又大きいといわなければならない。大学図書館が学内の利用者だけでなく、県内医療機関へ文献複写の相互協力はもとより、その他の情報提供についても病院図書室をサポートしていくことは、究極的には地域住民への医療サービスに繋がってくる。

最近では電子ジャーナルの導入、インターネットによる情報の収集など情報の迅速化が進んでいるが、この面においても地域医療機関との情報交換、支援体制等相互協力の推進が必要になってくるように思われる。

(とよひらともみ： 図書館専門員)



[写真は附属図書館医学部分館]

お知らせ

◎ 開館案内 2000年10～12月

10月							11月							12月							
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	
1	2	3	4	5	6	7				1	2	3	4							1	2
8	9	10	11	12	13	14	5	6	7	8	9	10	11	3	4	5	6	7	8	9	
15	16	17	18	19	20	21	12	13	14	15	16	17	18	10	11	12	13	14	15	16	
22	23	24	25	26	27	28	19	20	21	22	23	24	25	17	18	19	20	21	22	23	
29	30	31	26	27	28	29	30	24	25	26	27	28	29	30							
													31								

- ・開館時間 通常期：月～金 [黒字] 8:30～22:00 土・日・祝 [緑字] 13:00～20:00
- ・ 休業期：月～金 [青字] 8:30～17:00 土・日・祝 [赤字] 休館
- ・休館日 土・日曜 (冬季休業：12/26～1/6) 年末年始 (12/28～1/4)
琉大祭 (11/11～11/12) 定例休館日 (10/25,11/30,12/21)

(年間の開館案内はホームページをご覧ください)

◎長期貸出開始

12月26日(火)～1月6日(土)は冬季休業のため、12月10日から長期の貸出しを行います。
貸出冊数は通常通りで変更はありません。返却期限は、平成13年1月16日(月)です。
また、長期貸出した資料については、貸出延長の手続きはできませんのでご注意ください。



場 所：琉球大学附属図書館 1階多目的ホール
上映時間：☆休業期13:30～
通常期 ①15:00～ ②18:00～

【10月の予定】

- 10月4日(水) 石の花：KAMEHHb IN LIBETOK/1946/ロシア映画 80分
- 10月11日(水) 自転車泥棒：LADRI DI BICIDELETTE/1948/イタリア映画 93分
- 10月18日(水) 第三の男：THE THIRD MAN/1949/アメリカ映画 120分
- 10月25日(水) 審判：THE TRIAL/1963/アメリカ映画 118分

【11月の予定】

- 11月1日(水) イエスタ・ベルリングの伝説：GOSTA BERLINGS SAGA/1924/スウェーデン映画 87分
- 11月8日(水) 喜びなき街：DIE FREUDLOSE GASSE/1925/ドイツ映画 74分
- 11月15日(水) アンナ・クリスティ：ANNA CHRISTIE/1930/アメリカ映画 89分
- 11月22日(水) グランド・ホテル：GRAND HOTEL/1932/アメリカ映画 112分
- 11月29日(水) マタ・ハリ：MATA HARI/1931/アメリカ映画 89分

【12月の予定】

- 12月6日(水) 断崖：SUSPICION/1941/アメリカ映画 99分
- 12月13日(水) ローマの休日：ROMAN HOLIDAY/1953/アメリカ映画 118分
- 12月20日(水) ティファニーで朝食を：BREAKFAST AT TIFFANY'S/1961/アメリカ映画 114分
- 12月25日(月) 素晴らしき哉、人生：IT'S WONDERFUL LIFE/1946/アメリカ映画 130分

琉球大学附属図書館報 “びぶりお” 第33巻 第4号 (通巻第128号)
平成12年10月1日発行
発行：琉球大学附属図書館 〒903-0214 沖縄県中頭郡西原町千原1番地
電話 098(895)8168 Fax.098(895)8169
発行人：附属図書館事務部長 伊藤 祐三 編集：“びぶりお”編集委員会